

論 文

過去のいじめられた体験が青年期の友人関係に及ぼす影響

山口 由加・長野 恵子

(西九州大学大学院 健康福祉学研究科)

(平成24年11月14日受理)

The Impact of Past Experiences of Bullying on Peer Relationships during Adolescence

Yuka YAMAGUCHI and Keiko NAGANO

Graduate School of Health and Social Welfare Science, Nishikyushu University

(Accepted: November 14 , 2012)

Abstract

This study explains the nature of friendships during adolescence from the perspective of their deterioration and examines the impact of past experiences of bullying on peer relationships during adolescence. For this purpose, questionnaires were administered to 337 first-year university students (129 male, 208 female).

Gender differences were found with regard to the manner in which students socialized with their friends. The male students tended to socialize with their friends in ways that did not tend to intrude on each other's private lives, while the female students tended to maintain connections of a kind in which they went out of their way to not make their friends feel uncomfortable and strove to maintain light-hearted and smooth relationships with each other.

Thirty-two percent of all respondents had experienced bullying at some point in the past. Among those, 18% had only been victims of bullying, while 14% had been both victims and bullies themselves. This study demonstrated a strong tendency in victims of bullying among university students to socialize with their friends in ways that enabled them to avoid both being hurt by and hurting their friends. This suggests that, among the current generation of youngsters, bullying experiences are a factor in inducing the end of peer relationships.

Keywords : past experiences of bullying, adolescence, peer relationships

I . 問題と目的

Erikson (1950)¹⁾は、ライフサイクルという考えのもと、青年期には自我同一性の危機が訪れるとしている。また、青年期の心理社会的危機を「アイデンティティ対アイデンティティの拡散」と捉えており、このような時期に仲間集団や外集団、リーダーシップのモデルが重要であると述べている。しかし、現代青年の友人関係に関する先行研究を概観する中で、友人と表面的な付き合い方をしたり友人と関係を深められなかったり友人関係の希薄化を示唆する指摘がある。岡田(2002)²⁾によると現代青年は、自分の内面を開示するような関わり方を回避し、表面的な楽しさの中で群れたり、互いの内面に踏み込まないように気を使う傾向があると述べている。また、内面的友人関係が青年の健康な成熟と関わりがあるならば、これを避ける現代の青年は、適応の程度が低く、また自己の発達において未熟な特徴を示すと述べている。岡田(2008)³⁾は、現代青年は、相手の話を遮らないように聞くこと、相手の意見や価値観を否定しないようにすること、内面的な話題に気を使い相手の気持ちを察するよう立ち入りすぎないようにするなど他者との心理的距離を置き相手に同調する傾向が際立って認識される可能性があるとし唆している。このように現代青年は友人との距離を一定に保ち、内面的な関わりを避け、表面的な関わりをすることで、相手を傷つけることや自分が傷つくのを避けていると考えられる。また、他者の内面に立ち入らずに表面的な楽しさを求めているとも考えられる。松井(1990)⁴⁾は、現代の友人関係の希薄化を指摘する中で、内面的友人関係を避け、互いに傷つけ合わないよう表面的に円滑な関係を志向する傾向を強調している。また、白井(2006)⁵⁾は、携帯電話や電子メールの普及により、希薄化が促進されたと述べている。このように、希薄化に関わる要因として様々な事柄が挙げられるが、中でもいじめは学校生活において頻繁にみられる状況であり、友人関係の付き合い方に影響しているのではないかと、筆者は考えている。

文部科学省(2011)⁶⁾は、「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の中でいじめの定義を「当該児童生徒が、一定の人間関係のあるものから、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの。なお起った場所は学校の内外を問わない。」としている。さらに、平成23年度のいじめ認知件数は、70,231件であり、ここ数年と比べると減少しているものの、近年、いじめを苦にした自殺が社会的な問題となってきた。岡安・高山(2000)⁷⁾によると、いじめにより抑うつや不安、心身疾患、対人不安などの不適応が現れることを明らかにしており、増田・平川・山中・古賀(2009)⁸⁾は、小学校・中学校で受けたいじめがその

後の病気や問題行動、適応面や精神面に影響を及ぼすと述べている。一方、坂西(1995)⁹⁾は、いじめられ体験が回想的に感じている当時の大きさをもとに、心理的・身体的にマイナスの影響とプラスの影響があることを指摘しており、いじめられた体験が強ければ強いほど、長期的な影響も強くなっていると述べている。このように、いじめはいじめられている時だけでなく、その後の学校適応や、友人関係、成人した後までも長期的な影響を及ぼすことがあると考えられる。中島(2007)¹⁰⁾は、大学生は安定して生活しているようで、いじめの経験を持つ女子学生が多く、その影響が、現在の自己像や友人関係の持ち方に negative にも positive にも影響を及ぼしていることを示唆している。

以上のように、青年期の友人関係の希薄化が指摘される中で、さらに学校生活におけるいじめが、その後の友人関係に影響している。しかし、いじめといってもいじめられた側だけでなく、傍観者であってもいじめを間近に体験しており見過ごすことはできない。そこで、いじめの立場(被害者・被害者かつ加害者・加害者・傍観者・無関係)やいじめの時期、内容、対処法などについて、さまざまな状況を把握した上で、友人関係との関係性を見ていくことにする。

したがって、本研究の目的として、いじめの実態を把握したうえで、①現代の大学生の友人関係の実態を希薄化という観点から明らかにし、②過去のいじめられた体験が友人関係の希薄化に及ぼす影響について明らかにする。

なお、本研究では「友人関係で自分の内面を開示するような関わり方を回避し、表面的な楽しさの中で群れたり互いの内面に踏み込まないようにと気を使うこと」(岡田,2002)²⁾を希薄化と捉えることとする。

II . 方 法

1 . 調査対象

大学1年生337名(男性129名、女性208名)を対象とした。

2 . 調査手続き

講義時間を利用し、過去のいじめの実態、友人関係尺度、過去のいじめの影響についてのアンケートを配布し、無記名自己記入法によって実施した。調査期間は平成22年7月中旬。

3 . 調査内容

1) 過去のいじめの実態

過去のいじめを把握するために、坂西(1995)⁹⁾の質問内容を参考に用いた。

①いじめの役割について

過去のいじめ体験を把握するために“過去のいじめ場面で主にどのような立場でしたか”と質問し、「1. いじめたことがある」「2. いじめられたことがある」「3. いじめを見て見ぬふりをしたことがある」「4. いじめたこともいじめられたこともある」「5. いじめを見たことがない」の5項目の中から、回答を求めた。

②いじめの時期について

いじめの時期を把握するために、いじめの役割において「いじめをみたことがない」と回答した学生以外に、「1. 幼稚園・保育園の時」「2. 小学校の時」「3. 中学校の時」「4. 高校の時」の選択肢を用いてあてはまるものすべてに回答を求めた。

③いじめの内容について

いじめの内容を把握するために、いじめの役割において「いじめをみたことがない」と回答した学生以外に、「1. 暴力」「2. 嫌がらせ」「3. 仲間はずれ」「4. 脅迫的な指図」「5. その他」の選択肢を用いてあてはまるものすべてに回答を求めた。

④いじめの対処法について

いじめの対処法を把握するために、いじめの役割において「いじめられたことがある」と回答した学生には、「1. 何もしないでいじめられるままになっていた」「2. 家族に相談した」「3. 先生に相談した」「4. カウンセラーに相談した」「5. 友人に相談して力をかしてもらった」「6. 自分だけで反撃した」「7. その他」の選択肢を用いてあてはまるものすべてに回答を求めた。

また、「いじめを見て見ぬふりをしたことがある」と回答した学生には、「1. 何もしないでそのままにした」「2. 家族に相談した」「3. 先生に相談した」「4. カウンセラーに相談した」「5. いじめられている人を助けた」「6. その他」の選択肢を用いてあてはまるものすべてに回答を求めた。

2) 友人関係尺度

大学生生活場面において同性の友人とどのような思いでつきあい、関係を形成しているかを測るために、岡田(2007)が作成した「友人関係尺度」35項目を用いて調査を実施した。表1には、4つの下位項目と特徴的な質問項目を例示している。

本尺度は、『自己閉鎖』『傷つけられることの回避』『傷つけることの回避』『快活的関係』4因子で構成されており、“あなたは、普段同性の友達とどのような思いでつきあっていますか”といった教示のもと、「全くあてはまらない(1)」～「とてもよくあてはまる(6)」の6段階で回答を求めた。表1では、『快活的関係』を楽しく円滑な関係をとる関わり方と称されているが、内容的には

表1 友人関係尺度

| |
|---|
| 自己閉鎖：内面的友人関係を避け、互いの内面に踏み込まないような関わり方(17項目) |
| ・本当の気持ちを話さない |
| ・お互いのプライバシーに立ち入らない |
| 傷つけられることの回避：友人から否定的に評価されないように気を使う関わり方(10項目) |
| ・友達からどう見られているのか気になる |
| ・友達から傷つけられないようにふるまう |
| 傷つけることの回避：友人を不快にさせないように気を使う関わり方(9項目) |
| ・友達を傷つけないようにする |
| ・友達の内面に土足で踏み込まないようにする |
| 快活的関係：楽しく円滑な関係をとる関わり方(3項目) |
| ・冗談を言って相手を笑わせる |
| ・ウケるようなことをする |

*重複項目あり

友人と表面的で軽躁的な付き合い方を意味している。

3) 過去のいじめの影響について

過去のいじめが現在の友人関係に影響していると感じているか把握するために、1)のいじめの実態についての質問で、「2. いじめられたことがある」「3. いじめを見て見ぬふりをしたことがある」「4. いじめたこともいじめられたこともある」のいずれかを選択した学生において“あなたは過去のいじめが現在の友達とのつきあい方に影響していると思いますか”と質問し、「とても影響していると思う(1)」～「全く影響していないと思う(5)」の5件法で回答を求めた。

Ⅲ. 結 果

1. 過去のいじめの実態

いじめの実態を図1に示しているように、「被害者」「被害者かつ加害者」「加害者」「傍観者」「無関係」の5つに分類し質問した。その結果、「被害者」が60名(18%)、「被害者かつ加害者」が47名(14%)、「加害者」が30名(9%)、「傍観者」が107名(32%)、「無関係」が93名(27%)であり、被害者の経験をしている人は全体の32%いることが示された。

さらに、いじめの役割、時期、内容、対処法について男女差があるかどうかを見るために χ^2 検定を行った。その結果、「いじめられたことがある(被害者)」と答えた学生は、男性が18名(14%)、女性が42名(20%)であり、男女間において有意差は認められなかった($\chi^2 = 2.12, n.s.$)。「いじめたことがある(加害者)」と回答した学生は、男性が20名(15.5%)、女性が10名(4.8%)であり、男性が女性よりもいじめた経験が多いという結果であった($\chi^2 = 11.23, df = 1, p < .01$)。「いじめを見て見ぬふりをした(傍観者)」と回答した学生は、男

性が29名(22.5%)、女性が78名(37.5%)であり、女性が男性よりもいじめを見て見ぬふりをしていることが多いという結果であった($\chi^2=8.29$, $df=1$, $p<.01$)。「いじめを見たことがない(無関係)」と答えた学生は、男性が46名(35.7%)、女性が47名(22.6%)であり、男性が女性よりもいじめを見たという%が少ない結果であった($\chi^2=6.8$, $df=1$, $p<.01$)(表2)。

すなわち、過去のいじめにおいて、「加害者」と「無関係」は男性が女性よりも多く、「傍観者」は女性が男性よりも多いという結果が示された。また、被害者においては男女差が見られなかったものの、割合でみると「被害者」のみは、男性が7人に1人、女性が5人に1人がいじめられた体験をしており、「被害者かつ加害者」を入ると男性が4人に1人、女性が3人に1人がいじめられた体験をしていることになる。

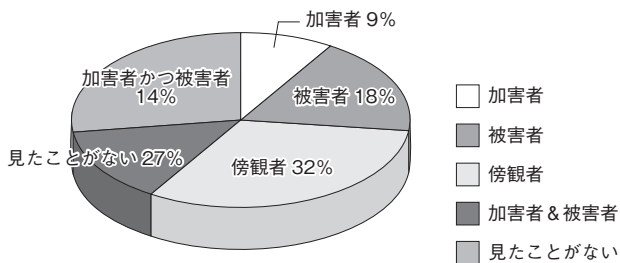


図1 過去のいじめ体験の役割

表2 過去のいじめの実態 (n=337)

| | 男性 | 女性 | χ^2 値 |
|----------|--------------|--------------|------------|
| 加害者 | 15.5% (n=20) | 4.8% (n=10) | 11.23 ** |
| 被害者 | 14.0% (n=18) | 20.2% (n=42) | 2.12 n.s. |
| 傍観者 | 22.5% (n=29) | 37.5% (n=78) | 8.29 ** |
| 加害者かつ被害者 | 12.4% (n=16) | 14.9% (n=31) | 0.41 n.s. |
| 無関係 | 35.7% (n=46) | 22.6% (n=47) | 6.8 ** |
| Total | 100% (n=129) | 100% (n=208) | |

**p<.01

ここからは、それぞれのいじめの立場ごとに、いじめの内容、時期、対処法における結果をまとめる。

1) 被害者について

いじめられた時期について、いずれの学校段階において男女間に有意な差は認められなかったものの、割合から見ると、加害者同様小学校から中学校にかけていじめられる体験をしている人が多いことが示された。また、いじめられた内容においても男女間に有意な差は見られなかったものの割合でみると、男性は「嫌がらせ」が多く、女性は「嫌がらせ」と「仲間はずれ」によっていじめられていることが示された。

いじめの対処法については、「何もしないでいじめられるままになっていた」「家族に相談した」「先生に相談した」「カウンセラーに相談した」「友人に相談し力をかしてもらった」「自分だけで反撃した」「その他」の7つ

表3 被害者 対処方法 (性差の検討)

| | n=60 | 男性 (n=18) | 女性 (n=42) | χ^2 値 |
|----------------------|-------------|--------------|-----------|------------|
| 何もしないでいじめられるままになっていた | 33.3% (n=6) | 31.0% (n=13) | 33 n.s. | |
| 家族に相談した | 16.7% (n=3) | 38.1% (n=16) | 2.67 n.s. | |
| 先生に相談した | 38.9% (n=7) | 28.6% (n=12) | 62 n.s. | |
| カウンセラーや相談員に相談した | 0% (n=0) | 11.9% (n=5) | 2.39 n.s. | |
| 友人に相談し力をかしてもらった | 16.7% (n=3) | 21.4% (n=9) | .18 n.s. | |
| 自分だけで反撃した | 38.9% (n=7) | 14.3% (n=6) | 4.49 * | |

*p<.05

に分類し、男女に関して χ^2 検定を行ったところ「自分だけ反撃した」のみ男女間に有意な差が認められた(表3)。

「自分だけで反撃した」という学生は、13名(21.7%)であった。その内訳は、男性7名(38.9%)、女性6名(14.3%)であり、 χ^2 検定の結果、5%水準で有意な人数比率の偏りが認められ、自分だけで反撃した学生は男性が女性よりも有意に高いことが明らかになった($\chi^2=4.49$, $df=1$, $p<.05$; 男性>女性)。

このことは、いじめられたことのある学生は、男性が女性よりも自分だけで反撃し対処する傾向が強いという事が示唆されている。また、割合でみると、男性は自分だけで反撃するか先生に相談する人が多く、女性は家族に相談する人が最も多いことが示された。

2) 被害者かつ加害者について

いじめた時期については、いずれの学校段階において男女間に有意な差は認められなかったものの、割合から見ると被害者、加害者、傍観者とも同様に、小学校から中学校にかけていじめをしている人が多いことが示された。また、いじめられた時期については、「幼稚園・保育園」「小学校」「中学校」「高校」の4つの学校段階に分類し、男女に関して χ^2 検定を行ったところ、「小学校」のみ男女間で有意な差が認められた(表4)。

「小学校」と答えた学生は、26名(55.3%)であった。その内訳は、男性7名(43.8%)、女性19名(61.3%)であり、 χ^2 検定の結果、5%水準で有意な人数比率の偏りが認められ、小学校の時にいじめられた学生は女性が男性よりも有意に高い結果であった($\chi^2=4.05$, $df=1$,

表4 被害者かつ加害者の被害時の学校段階 (性差の検討)

| | n=47 | 男性 (n=16) | 女性 (n=31) | χ^2 値 |
|---------|-------------|--------------|-----------|------------|
| 保育園・幼稚園 | 12.5% (n=2) | 0% (n=0) | 3.79 n.s. | |
| 小学校 | 43.8% (n=7) | 61.3% (n=19) | 4.05 * | |
| 中学校 | 50.0% (n=8) | 51.6% (n=16) | 1.31 n.s. | |
| 高校 | 18.8% (n=3) | 9.7% (n=3) | 0.01 n.s. | |

*p<.05

表5 被害者かつ加害者の加害時の内容(性差の検討)

| n=47 | 男性(n=16) | 女性(n=31) | χ^2 値 |
|--------|-------------|-------------|------------|
| 暴力 | 18.8%(n=3) | 0%(n=0) | 6.2 * |
| 嫌がらせ | 62.5%(n=10) | 35.5%(n=11) | 3.12 n.s |
| 仲間はずれ | 43.8%(n=7) | 83.9%(n=26) | 8.12 ** |
| 脅迫的な指図 | 18.8%(n=3) | 0%(n=0) | 6.21 * |

*p<.05 **p<.01

p<.05; 男性<女性)

このことは、「小学校」の段階においていじめられている者は女性が男性より多いという結果を示しており、また割合から見ると、いじめは主に小学校から中学校で起きていることが示された。

いじめたときのいじめの内容は「暴力」「嫌がらせ」「仲間はずれ」「脅迫的な指図」の4つに分類し、男女に関して χ^2 検定を行ったところ、「暴力」「仲間外れ」「脅迫的な指図」においては、男女間に有意な差が認められた(表5)

「暴力」と答えた学生は、3名(6.4%)であった。その内訳は、男性3名(18.8%)、女性0名(0%)であり、 χ^2 検定の結果、5%水準で有意な人数比率の偏りが認められ、暴力をした学生は、男性が女性よりも有意に高い結果であった($\chi^2=6.20$, df=1, p<.05; 男性>女性)

「仲間はずれ」と答えた学生は、33名(70.2%)であった。その内訳は、男性7名(43.8%)、女性26名(83.9%)であり、 χ^2 検定の結果、1%水準で有意な人数比率の偏りが認められ、仲間はずれをした学生は女性が男性よりも有意に高い結果であった($\chi^2=8.12$, df=1, p<.01; 男性<女性)

「脅迫的な指図」と答えた学生は、3名(6.4%)であった。その内訳は、男性3名(18.8%)、女性0名(0%)であり、 χ^2 検定の結果、5%水準で有意な人数比率の偏りが認められ、脅迫的な指図をした学生は、男性が女性よりも有意に高い結果であった($\chi^2=6.21$, df=1, p<.05; 男性>女性)

このことは、「暴力」や「脅迫的な指図」は男性が女性よりもそのような方法をとりがちであり、「仲間はずれ」は女性が男性よりもそのような方法をとりがちであるということが推測される。

いじめられた時のいじめの内容を「暴力」「嫌がらせ」「仲間はずれ」「脅迫的な指図」の4つに分類し、男女に関して χ^2 検定を行ったところ、「暴力」「嫌がらせ」「仲間はずれ」において、男女間に有意な差が認められた(表6)

「暴力」と答えた学生は、5名(10.6%)であった。その内訳は、男性4名(25.0%)、女性1名(3.2%)であり、 χ^2 検定の結果、5%水準で有意な人数比率の偏りが認められ、暴力を受けた学生は、男性が女性よりも有

表6 被害者かつ加害者の被害時の内容(性差の検討)

| n=47 | 男性(n=16) | 女性(n=31) | χ^2 値 |
|--------|-------------|-------------|------------|
| 暴力 | 25.0%(n=4) | 3.2%(n=1) | 5.26 * |
| 嫌がらせ | 87.5%(n=14) | 41.9%(n=13) | 8.96 ** |
| 仲間はずれ | 56.3%(n=9) | 90.3%(n=28) | 7.32 ** |
| 脅迫的な指図 | 6.3%(n=1) | 3.2%(n=1) | 24 n.s. |

*p<.05, **p<.01

意に高い結果であった($\chi^2=5.26$, df=1, p<.05; 男性>女性)

「嫌がらせ」と答えた学生は、27名(57.4%)であった。その内訳は、男性14名(87.5%)、女性13名(41.9%)であり、 χ^2 検定の結果、1%水準で有意な人数比率の偏りが認められ、嫌がらせを受けた学生は男性が女性よりも有意に高い結果であった($\chi^2=8.96$, df=1, p<.01; 男性>女性)

「仲間はずれ」と答えた学生は、37名(78.7%)であった。その内訳は、男性9名(56.3%)、女性28名(90.3%)であり、 χ^2 検定の結果、1%水準で有意な人数比率の偏りが認められ、仲間はずれを受けた学生は女性が男性よりも有意に高い結果であった($\chi^2=7.32$, df=1, p<.01; 男性<女性)

このことは、「暴力」と「嫌がらせ」は男性が女性よりもとりがちな方法であり、「仲間はずれ」は女性が男性よりもとりがちな方法であることが示唆された。すなわち、男性は暴力や嫌がらせによっていじめを受け、女性は仲間はずれによっていじめられている頻度が多いという事を示している。

いじめられた時のいじめの対処法を「何もしないでいじめられるままになっていた」「家族に相談した」「先生に相談した」「カウンセラーに相談した」「友人に相談し力をかしてもらった」「自分だけで反撃した」「その他」の7つに分類し、男女に関して χ^2 検定を行ったところ、「友人に相談し力をかしてもらった」のみ男女間に有意な差が見られた。(表7)

「友人に相談し力をかしてもらった」と答えた学生は、15名(31.9%)であった。その内訳は、男性2名(12.5%)

表7 被害者かつ加害者の被害時の対処方法(性差の検討)

| n=47 | 男性(n=16) | 女性(n=31) | χ^2 値 |
|----------------------|------------|-------------|------------|
| 何もしないでいじめられるままになっていた | 37.5%(n=6) | 16.1%(n=5) | 2.69 n.s. |
| 家族に相談した | 31.3%(n=5) | 35.5%(n=11) | .08 n.s. |
| 先生に相談した | 18.8%(n=3) | 22.6%(n=7) | .09 n.s. |
| カウンセラーや相談員に相談した | 12.5%(n=2) | 3.2%(n=1) | 1.52 n.s. |
| 友人に相談し力をかしてもらった | 12.5%(n=2) | 41.9%(n=13) | 4.21 * |
| 自分だけで反撃した | 31.3%(n=5) | 12.9%(n=4) | 2.29 n.s. |

*p<.05

女性13名(41.9%)であり、 χ^2 検定の結果、5%水準で有意な人数比率の偏りが認められ、友人に相談し力がかしてもらった学生は女性が男性よりも有意に高い結果であった($\chi^2=4.21$, $df=1$, $p<.05$; 男性<女性)。

このことは、いじめたことはいじめられたこともある学生はいじめられた時、女性が男性よりも友人に相談し力がかしてもらう者が多い結果であり、割合でみると男性はいじめられるままになっている学生が多く、女性は友人に相談し力がかしてもらう学生が多いことが示された。

3) 加害者について

加害者の立場をとった人のいじめの時期については、いずれの学校段階においても男女間に有意な差は認められなかったものの割合からみると、約9割が小学校から中学校の間で起きていることが示された。

いじめの内容について「暴力」「嫌がらせ」「仲間はずれ」「脅迫的な指図」の4つに分類し、男女に関して χ^2 検定を行ったところ、「仲間はずれ」にのみ男女間に有意な差が認められた(表8)。

「仲間はずれ」と答えた学生は、14名(46.7%)であった。その内訳は、男性5名(25.5%)、女性9名(90%)であり、 χ^2 検定の結果、1%水準で有意な人数比率の偏りが認められ、仲間はずれをした学生は女性が男性よりも有意に高い結果であった($\chi^2=11.31$, $df=1$, $p<.01$; 男性<女性)。

すなわち、女性は明らかに「仲間はずれ」によっていじめられていることが示された。また、「嫌がらせ」は性差に有意な差は認められなかったものの、割合でみると、男性は主に「嫌がらせ」によっていじめられていることが示され、全体的に見ると「嫌がらせ」と「仲間はずれ」によっていじめられている傾向にあることが示唆された。

表8 加害内容(性差の検討)

| n=30 | 男性(n=20) | 女性(n=10) | 全体 | χ^2 値 |
|--------|-------------|------------|-------------|------------|
| 暴力 | 20.0%(n=4) | 0%(n=0) | 3.3%(n=1) | 2.3 n.s. |
| 嫌がらせ | 75.0%(n=15) | 40.0%(n=4) | 36.7%(n=11) | 3.52 n.s. |
| 仲間はずれ | 25.5%(n=5) | 90.0%(n=9) | 56.7%(n=17) | 11.31 ** |
| 脅迫的な指図 | 10.0%(n=2) | 0%(n=0) | 16.7%(n=5) | 1.07 n.s. |

** $p<.01$

4) 傍観者について

いじめを見て見ぬふりをした時期については、いずれの学校段階において男女間に有意な差は認められなかったものの、割合から見ると加害者と被害者同様、小学校から中学校にかけていじめをしている人が多いことが示された。また、対処法についても男女間に有意差は認められなかったが、男女とも明らかに「何もしないでそのままにした」人が多いことが示された。

表9 傍観内容(性差の検討)

| n=107 | 男性(n=29) | 女性(n=78) | χ^2 値 |
|--------|-------------|-------------|------------|
| 暴力 | 10.3%(n=3) | 6.4%(n=5) | 47 n.s. |
| 嫌がらせ | 75.9%(n=22) | 48.7%(n=38) | 6.32 * |
| 仲間はずれ | 62.1%(n=18) | 82.1%(n=64) | 4.71 * |
| 脅迫的な指図 | 6.9%(n=2) | 5.1%(n=4) | .13 n.s. |

* $p<.05$

いじめを見て見ぬふりをしたときの内容については、「暴力」「嫌がらせ」「仲間はずれ」「脅迫的な指図」の4つに分類し、男女に関して χ^2 検定を行ったところ、「嫌がらせ」「仲間はずれ」においては、男女間に有意な差が認められた(表9)。

「嫌がらせ」と答えた学生は、60名(56%)であった。その内訳は、男性22名(75.9%)、女性38名(48.7%)であり、 χ^2 検定の結果、5%水準で有意な人数比率の偏りが認められ、嫌がらせを見た学生は男性が女性よりも有意に高い結果であった($\chi^2=6.32$, $df=1$, $p<.05$; 男性>女性)。

「仲間はずれ」と答えた学生は、82名(76.6%)であった。その内訳は、男性18名(62.1%)、女性64名(82.1%)であり、 χ^2 検定の結果、5%水準で有意な人数比率の偏りが認められ、仲間はずれを見た学生は女性が男性よりも有意に高い結果であった($\chi^2=4.71$, $df=1$, $p<.05$; 男性<女性)。

このことは、いじめを見て見ぬふりをした学生は、男性は「嫌がらせ」によるいじめを見た人が多く、女性は「仲間外れ」によるいじめを見た人が多いという結果を示している。

2. 大学生の友人関係の特徴について

1) 大学生の友人関係について

大学生の友人関係の特徴を、友人関係尺度(5件法)を用いて検討した。その結果、下位尺度の平均点は『自己開示』は3.26、SDは1.22、『傷つけられることの回避』は3.49、SDは1.27、『傷つけることの回避』は4.34、SDは1.23、『快活的関係』は4.37、SDは1.21であった。平均点から見ると、最小値が1、最大値が5ということから『傷つけることを回避』と『快活的関係』の平均点が高い。よって、友人に対して傷つけることを回避し、表面的で快活的な付き合い方をすることが示された。

2) 友人関係尺度 男女差の検討

各下位尺度についてt検定を実施し性差の検討を行った(表10)。その結果、『自己閉鎖』($t(335)=2.86$, $p<.01$)については、男性が女性よりも有意に高い得点を示した。『傷つけることの回避』($t(335)=3.48$, $p<.01$)、『快活的関係』($t(335)=2.18$, $p<.05$)につ

表10 男女別の平均値とSDおよびt検定の結果(n=337)

| | 男性 | | 女性 | | t 値 | |
|-------------|-------|------|-------|------|-------|------|
| | 平均 | SD | 平均 | SD | | |
| 自己閉鎖 | 53.97 | 9.63 | 51.2 | 7.95 | 2.86 | ** |
| 傷つけられることの回避 | 31.76 | 7.77 | 32.12 | 6.96 | -0.44 | n.s. |
| 傷つけることの回避 | 33.68 | 5.59 | 35.67 | 4.73 | -3.48 | ** |
| 快活的関係 | 9.58 | 2.71 | 10.23 | 2.59 | -2.18 | * |

*p<.05, **p<.01

いては、女性が男性よりも有意に高い得点を示した。『傷つけられることの回避』に関しては、性差は認められなかった(t(335)=.44, n.s.)。このように、男女間に有意な差はみられたものの、あくまでも全体の中間辺りの値という結果であった。

3. 過去のいじめられた体験が現在の大学生の友人関係の及ぼす影響

1) 過去いじめられた体験が現在の友人関係に及ぼす影響の実態

過去のいじめの役割を独立変数、友人関係尺度を従属変数とし、それぞれの平均値について一要因の分散分析を実施した。その結果、『傷つけられることの回避』『傷つけることの回避』において5%水準で有意な差が認められた(F(4,332)=2.740, p<.05)(F(4,332)=2.481, p<.05)。さらに、Tukey法による多重比較を行った結果、『傷つけられることの回避』は、「被害者」と「被害者かつ加害者」、「被害者」と「無関係」において5%水準で有意な差が示された(表11)。これらのことから「被害者」は、「被害者かつ加害者」と「無関係」よりも傷つけられることを回避し、「被害者」は、「被害者かつ加害者」よりも傷つけることを回避する傾向があるということであり、被害者においてはいじめ体験が何らかの形

でその後の友人関係に影響している事が示唆された。

2) 過去のいじめが現在の友人関係に及ぼしている影響の程度について

過去のいじめが影響していると感じている人は全体の53.7%であり、約半数の人が影響を受けており、約15%の人が影響を受けていないという結果であった。また、過去のいじめの影響の程度と友人関係尺度との関係において、一要因の分散分析を行った。その結果、『自己閉鎖』と『傷つけられることの回避』において有意な差が認められた。さらに、Tukey法による多重比較を行った結果、『自己閉鎖』は「とても影響している」と「全く影響していない」の間において有意な差が認められた(表12)、『傷つけられることの回避』は、「とても影響している」「影響している」「どちらでもない」と「全く影響していない」の間で有意な差が認められた。これらのことから、過去のいじめが現在の友人関係に影響していると感じている人は、友人に対して、自己閉鎖的で相手から傷つけられないような付き合い方をする傾向にあることが示唆された。

IV. 考察

1. 過去のいじめ体験の実態について

大学生が過去に体験したいじめについて、いじめの役割を「被害者」「被害者かつ加害者」「加害者」「傍観者」「無関係」の5つに分類し、いじめの時期、いじめの内容、いじめの対処法から、過去のいじめの特徴について検討していく。

約7割以上の学生が何らかの形でいじめに関わっていることが明らかになり、約3割の学生が被害体験をしていることが明らかになった。よって、いじめは見えない

表11 友人関係尺度の各項目におけるいじめの分類の平均値, SD, 分散分析の結果(n=337)

| | 加害者 | 被害者 | 傍観者 | 加害者かつ被害者 | 無関係 | |
|-------------|-------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-----------------|
| | 平均値(SD) | 平均値(SD) | 平均値(SD) | 平均値(SD) | 平均値(SD) | |
| 自己閉鎖 | 49.65(8.51) | 54.37(10.22) | 51.36(6.93) | 52.52(9.85) | 52.64(8.84) | F(4,332)=1.906 |
| 傷つけられることの回避 | 30.87(9.81) | 34.48(7.36) | 32.22(6.46) | 30.64(8.36) | 31.14(6.24) | F(4,332)=2.740* |
| 傷つけることの回避 | 33.72(6.56) | 36.54(5.05) | 34.92(4.84) | 33.82(4.31) | 34.77(5.31) | F(4,332)=2.481* |
| 快活的関係 | 10.48(2.37) | 9.52(3.32) | 10.06(2.38) | 10.53(2.50) | 9.77(2.59) | F(4,332)=1.409 |

*p<.05

表12 友人関係尺度の各項目におけるいじめの影響の平均値, SD, 分散分析の結果(n=214)

| | とても影響している | 影響している | どちらでもない | 影響していない | 全く影響していない | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--------------|---------------------|
| | 平均(SD) | 平均(SD) | 平均(SD) | 平均(SD) | 平均(SD) | |
| 自己閉鎖 | 55.47(9.18) | 51.01(7.4) | 53.73(8.32) | 53.34(6.99) | 47.32(13.48) | F(4,209)=3.484** |
| 傷つけられることの回避 | 33.71(7.54) | 33.05(7.3) | 32.77(6.31) | 31.63(3.69) | 26.61(10.73) | F(4,209)=3.000* |
| 傷つけることの回避 | 35.83(5.84) | 35.71(4.53) | 34.48(4.66) | 33.9(3.86) | 34.71(6.07) | F(4,209)=1.051 n.s. |
| 快活的関係 | 10.82(2.66) | 10.15(2.77) | 9.76(2.3) | 8.58(3.04) | 10.13(3.46) | F(4,209)=2.091 n.s. |

*p<.05, **p<.01,

ところでも頻繁に起こっていると考えられ、大学生の過去にはいじめが身近に存在していたと言える。さらに、「無関係」が全体の約3割を占める理由として、人によっていじめの認識の違いから生じたものではないかと推察される。

いじめの時期について、いじめはどの役割においても主に小学校から中学校にかけて起きており、文部科学省(2011)⁶⁾の児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査のいじめの認知件数と同様の結果であった。森岡(2007)¹¹⁾は、「幼稚園や小学校の低学年では、特定の子と親しくなると、友達を独占したいという欲望が強くなる。友達の取りあいを背景に同級生を攻撃することはあるが、単発的で個人と個人とのいさかいに終始することが多い。集団化し巧妙に隠されたいじめ事象はやはり10歳を過ぎた年代から始まる。言いかえると、いじめの中核的な事象は人格形成期、思春期の発達過程に生じるものである」と述べている。そのため、小学校から中学校にかけていじめは起きやすく今後の友人関係に大きく影響してくると考えられる。

いじめの内容を男女差で見えていくと、男性は「暴力」や「嫌がらせ」、「脅迫的な指図」によっていじめられている、またはいじめられている、女性の場合は「仲間はずれ」によっていじめられている、またはいじめられていることが明らかになった。岡安・高山(2000)⁷⁾は、「仲間はずれ・無視・悪口」のような関係性攻撃の被害者は女性に多く、「たたかれたり蹴られたり」といった身体的攻撃の被害者が男性に多いといういじめ被害の特徴を示している。落合・佐藤(1996)¹²⁾は、「男性は自分に自信を持って交友する自立したつきあい方をしており、これは他者と自分がそもそも異なる存在であると認識し、意見がぶつかっても傷ついたり自信を失ったりはしない」と述べている。すなわち、本研究で見出された結果は、岡安・高山(2000)と落合・佐藤(1996)の研究と一致している。一方で、松並・中村(2001)¹³⁾は、「女性にとって、他者との協調的な関係を築くことが生きていく上で重要なことである」と述べている。このことより、男性は周囲との関係よりも、自立した行動をとるために周りの影響を受けにくく、結果、直接的ないじめに繋がるのではないかと考えられる。女性は周囲との関係性を重視し、周りに同調するために、暴力や嫌がらせというような直接的ないじめよりも仲間はずれというような陰湿的ないじめを行う傾向にあると考えられる。

いじめの対処法について男女差で検討すると、「被害者」は、「自分だけで反撃した」が男性が女性よりも多く、「被害者かつ加害者」の被害時は「友人に相談し力がかしてもらった」が女性が男性よりも多いことが明らかになった。割合で見えていくと、「被害者」の男性は自分だけで反撃するか、先生に相談する人が多く、女性は

家族に相談する人が多い。「被害者かつ加害者」の男性は、何もしないでいじめられるままになっている人が多く、女性は友人に相談し力がかしてもらう人が多い。このことは、男性は自分だけで反撃する人が多く、誰にも頼らずに一人で対処し、自分ひとりで抱え込んでいる人も多いのではないかと推察される。また、女性は男性と対照的に自分ひとりで対処するというよりも家族や友人の力をかりて対処し心の安定を図っているのではないかと考えられる。友人に相談して力がかしてもらうことが重要なのは、友人は学校場面で一番身近な人であり、いじめの対処において一番の存在なのではないかと考えるからである。嶋(1992)¹⁴⁾によると「男性には、困難な問題に遭遇した場合でも、他者からの援助を受けずに独力でそれを解決することが期待されがちであるという、社会的・文化的要因がある」と述べられており、三品(2007)¹⁵⁾によると「女性は、他人とコミュニケーションをとる時間が多く、喋ることでストレスを発散させて自然に人間関係ができあがり、ソーシャル・サポートを受けやすい環境を作り上げている」と述べている。したがって男性は、いじめを受けていることを周囲の人たちに知られたくないという思いが強く働き、自己解決に繋がっているのではないかと考えられる。これに対し女性は、周囲の人たちとコミュニケーションを取ることで心の安定を図り、いじめの解決に繋げようとしているのではないかと推測される。

以上のように、本調査においてもいじめは日常的に起こっており、学童期から思春期といった友人関係を形成する時期にいじめが起きているということが示され、その後の友人関係に影響していることが明らかになった。

いじめの内容については、男性は「暴力」や「嫌がらせ」、「脅迫的な指図」が多く、女性は「仲間はずれ」が多いため、女性が男性よりもまわりの人の目につきにくい所でいじめが起きているのではないかと推測される。そのため、周囲はいじめをいじめとして認識しにくいのではないかと考えられる。しかし、女性はいじめを家族や友人に相談している人が多く、男性は一人で反撃する人が多いため、男性の方がいじめの解決に繋がりにくいのではないかと考えられる。よって、いじめはその時の友人関係だけでなく、後々の友人関係にまでも影響を及ぼしてくるのではないかと推察される。

2. 現代の大学生の友人関係の実態について

本研究では、現代の大学生の友人関係の実態を希薄化という観点から明らかにすることを第1の目的とした。そこで、本結果から、大学生は、楽しい雰囲気になるように冗談を言ったりして過ごすことで友人を楽しませ、友人に対して気を使いながらつきあいがちなのではないかと推察される。希薄化の定義の「友人関係で自分の内

面を開示するような関わり方を回避し、表面的な楽しさの中で群れたり、互いの内面に踏み込まないようにと気を使うこと」(岡田, 2002)が、友人関係尺度の4つの下位因子『自己閉鎖』『傷つけられることの回避』『傷つけることの回避』『快活的関係』に該当し、本結果と照らし合わせると『傷つけることの回避』『快活的関係』が高い得点を示しているため、大学生の友人関係は、一部希薄化しているといえよう。

上記のような特徴を男女別に見てみると、男性は『自己閉鎖』得点が女性よりも高かったことから、男性は互いの内面に深く入り込まず、表面的なつきあい方をしがちなのではないかと考えられる。一方で、「自分は自分。相手は相手。」というような割り切ったつきあいをし、相手には干渉しないようなつきあいをしているのではないかと推察される。

女性は、『傷つけることの回避』『快活的関係』得点が男性よりも高かったことから、友人を傷つけることを回避し、楽しい雰囲気になるように振舞いがちであることが示された。よって、女性はどちらかと言えば、自分が傷つくことを回避するよりも友人を不快にさせないように気を使い、冗談を言ってその場を楽しく円滑にするようなつきあい方をしているのではないかと推察される。

このように、友人関係の男女差に関しては先行研究からも類似の指摘がなされており、岡田(1993)¹⁶⁾、長沼・落合(1998)¹⁷⁾の指摘している事とも重なっている。

以上のことから、男女において異なった特徴が見られる背景には、友人に対して期待することや、求めるものが違うからなのではないかと考えられる。

3. 過去のいじめられた体験が現在の友人関係に及ぼす影響について

本研究では、過去のいじめられた体験が現在の友人関係に及ぼす影響について明らかにすることを第2の目的とした。そこで、いじめの役割を5群に分け、友人関係尺度において検討した。

まず、『傷つけられることの回避』について検討すると、「被害者」は、香取(1999)¹⁸⁾も指摘しているように、再びいじめられるのではないかとといった不安やもう傷つきたくないといった思いから、このようなつきあい方をしがちなのではないかと考えられる。また、質問項目の得点からみると、「友達からどのように思われているのか気になる」や「友達をがっかりさせないように気をつける」の得点が高い。このことから、友人の目を気にしてしまい自分の気持ちや考えよりも、友人の気持ちや行動に合わせてしまい、本音でのつきあいを避けるようなつきあい方をしがちなのではないかと推測されるのである。

次に、『傷つけることの回避』について検討すると、先に述べた通り「被害者」は、再びいじめられることに敏感であるために、自分の言動で友人を傷つけてしまい、友人が離れていくことを恐れているため、友人を傷つけることを回避するようなつきあい方をしがちであると考えられる。また、質問項目の得点からみると、「友達を傷つけないようにする」や「お互いの約束をやぶらない」の得点が高い。このことから、友人を「傷つけることの回避」というよりも、自分が「傷つけられることの回避」に繋がっているのではないかと考えられる。したがって、いじめは特に被害者を体験している者においては、いじめを受けたことで友人との距離が生じ、希薄化する傾向にあるのではないかと推察される。

さらに「被害者」、「傍観者」、「被害者かつ加害者」の過去のいじめの影響の程度が友人関係にどのように影響を及ぼしているか検討すると、いじめが現在の友人関係に影響していると感じている人は、全く影響していないと感じている人よりも自己閉鎖的で傷つけられることを回避するようなつきあい方をしているという事が示された。したがって、過去のいじめの影響において被害者は傷つけられることを回避するようなつきあい方をしがちであると示されたが、過去のいじめの影響の程度からも同様のことが言える。

本研究では、いじめを希薄化の要因のひとつとして考えたが、現代的な特徴から、白井(2006)⁵⁾は、「携帯電話や電子メールの普及など、メディア媒体の変化が希薄化の原因にある」と指摘している。松田(2000)¹⁹⁾は、「全面的で深い人間関係よりも選択的な人間関係を好む傾向の増大は携帯を使いこなす若者に特有なことではなく「都市化」という文脈で、全世代的に検討されるべき事柄である」と述べている。このような指摘を考慮していくと、携帯電話だけでなく、都市化が進んだことや核家族が増加したことで、余計に人との関わりが少なくなる可能性が強まっているものと予想できるのである。

参考文献

- 1) E.H.Erikson (1950) *Childhood and Society*. W.W.Norton. (仁科弥生訳1980 『幼児期と社会』 みすず書房)
- 2) 岡田努(2002) 現代大学生の「ふれあい恐怖心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究 10(2), 69-84.
- 3) 岡田努(2008) 現代青年の友人関係に関する私論 傷つけ合うことを避ける傾向について 日本パーソナリティ心理学大会発表論文集17, 208-209.
- 4) 松井豊(1990) 友人関係の機能 斉藤耕二・菊池章夫(編) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 283-296.

- 5) 白井利明 (2006) 現代青年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴 変容確認法の開発に関する研究 (Ⅲ) 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 54 (2), 151-171.
- 6) 文部科学省 (2011) 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/1325751.htm
- 7) 岡安孝弘・高山巖 (2000) 中学校におけるいじめ被害体験および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究48(4), 410-421.
- 8) 増田彰則, 平川忠敏, 山中隆夫, 古賀靖之 (2009) 小学校、中学校での「いじめられた体験」がその後の心身の健康に及ぼす影響について 心身医学 49(6), 605.
- 9) 坂西友秀 (1995) いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究 11(2), 105-115.
- 10) 中島千加子 (2007) 女子大学生のいじめ体験とその影響 洗足論叢, 36, 83-94.
- 11) 森岡正芳 (2007) いじめと学校臨床：基本的な考え方 臨床心理学 7(4), 441-446.
- 12) 落合良之, 佐藤有耕 (1996) 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究44, 55-65.
- 13) 松並知子, 中村晃 (2001) 友人関係における性差 日本心理学会第65回大会発表論文集 959
- 14) 嶋信宏 (1992) 「大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果」『社会心理学研究』7(1), 45-53
- 15) 三品徹平 (2007) 「職場での対人不安とソーシャルサポートの関連性」『臨床教育心理学研究』33(1), 83.
- 16) 岡田努 (1993) 現代の大学生における「内省および友人関係のありかた」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究 4(2), 162-170.
- 17) 長沼恭子, 落合良行 (1998) 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究 10, 35-47.
- 18) 香取早苗 (1999) 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究 32(1), 1-13.
- 19) 松田美佐 (2000) 「若者の友人関係と携帯電話利用 - 関係希薄化論から選択的關係論へ - 」社会情報学研究 4, p.111ff.